

明鏡をとりて、

みずからの

面像を

見るがごとし

(觀經)



私たちは、日頃よく鏡を見る。女性ばかりではなく、最近では男性も鏡の前に立って、整髪したり顔にクリームを塗ったり、オーデイコロンを塗ったりでなかなか忙しい。女性などはいったい、いち日に幾度鏡のなかの自分の顔や姿を眺めるだろう――。

ところで、鏡に自分の「こころ」まで写ってしまったら、どうだろう。

きっと男性だけでなく女性も、ほとんどの人が、鏡の前に立つ回数が減るだろう。いやきっとこの世から鏡が無くなるのではないだろうか。私の心の醜さが、不気味な笑みを浮かべているから……。

でも、この心に絶えず仏さまをいただいて生活していたら、その鏡には仏さまが写るのだから、きっとそこに写った私の姿を、掌を合わせて拝めるのではないのでしょうか。

鏡に写った私の姿を、拝む生き方が「南無阿弥陀仏」に他ならないのです。



十六羅漢図

「うけがたき人身すでにうけたり。あいがたき念仏往生の法門にいたり。娑婆をいとう心あり。極樂をねがう心おこりたり。弥陀の本願ふかし。往生はたなごころにあるなり。」

(法然上人「熊谷入道へつかはす返事」)

このお文に、くどくどとした説明は要りませんね。何と簡潔でしょう。何と力強いことでしょう。何と喜ばしいことでしょう。

人と生まれ、念仏の法門に逢い、俗世はわずらわしく、ただ極樂を願ひ、しかもその氣持をすくいとってくださる本願は深い。さあ、すべての条件は完璧に満たされたのです。

てのひら

まさしく、往生は掌の中にあるのです——法然上人にとって、熊谷入道にとつて、そして現代に生きるあなたとわたくしにとつても。

残されたことといえば、掌の中にある念仏という名の果実を、いただくことだけなのです。

本願の念仏には

ひとりだちせさせて

すけをささぬなり

——法然上人勅伝卷二十一——



十六羅漢図

現代は「ギブ・アンド・テイク」の世の中と云われます。労働・行為（ギブ）には、必ず賃金・報酬（テイク）を受ける権利があります。賃金・報酬を受けた時は、労働・行為をする義務を負います。

たとえば、小さな親切にも『ありがとう』の言葉だけではなく、金品を要求する……現代は権利・義務だけの世の中なのでしょうか。

何一ツの行（ギブ）も必要なく救われる（テイク）と云う教え。その様な教えては不安に思っ、つい私たちは、知恵や持戒・道心などの行をもつて、手助けしたく思います。宗祖法然上人は、『いや、ギブの行はいらぬ』とお示し下さいました。ただ、生まれたそのままだに、お念仏を頂くのみであります。

(問) 萌・鹿食^{いろ}いて三年が内に

死に候えば、往生せずと申し候^{まこと}うは、実にて候^{まこと}うやらむ。

(答) これまた、極めたる僻事^{ひがこと}にて候^{まこと}う。

——法然上人

「百四十五箇条問答集」より



十六羅漢図

今日のような時代でも、「迷信」の横行に驚かされる
ことが、実に多いですね。

「迷信」——その反対を「正信」と呼ぶとすれば、「迷信・正信」というのは、私たちの側から言うことであつて、「迷信」を信じる人は、「正信」を信じないでしようし、「正信」を信じる人は、「迷信」を取り合わないでしよう。とすれば、「迷信・正信」は、いつまで経つても、平行線^{をたどるだけ}でしよう。では、「念仏の教え」は、どうなのでしょう。

法然上人は、今から八百年も昔に「念仏の教え」を広められるに当り、

念仏の教えは、阿・弥・陀・仏の側で成しとげられた「救済の原理」であるから、「迷信・正信」の域を越えた立場にある。

と説かれ、「迷信・正信」に、実に明解な判断を下しておられます。

私たちは、この点に思いをなして、「念仏の教え」を頂いてまいりたいものです。

法蔵の誓願は

一一に成就したまえり

——法然上人ご法語——



十六羅漢図

俳句には季語があります。「竹の春」と言えば秋をあらわし、「竹の秋」と言えば春をあらわします。それは春になれば竹の子（筍）を出して、その親竹は自分の栄養をとられ、葉が黄色くなつてあたたかさも秋のようになるからです。また反対に秋になれば、竹の子も大きく成長して手がかからなくなります。それにより栄養分が自分の方へも回ってきて、親竹も生き生きとしてくるからなのです。

親には「この子のために！」
というこころがあります。そして願ひがあります。

アミダ仏は私達凡夫のために救わずにはおれないという大いなる願をたてられ、決して一人も漏らさないと誓われたのです。その大いなるみ仏の心をしっかりと私の心にいたたくのがお念仏なのです。

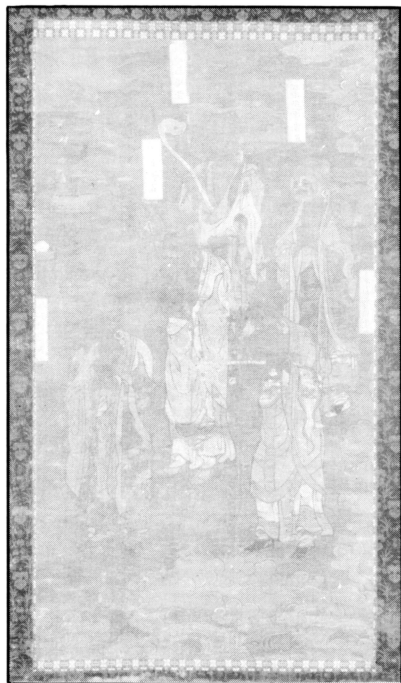
仏法に逢ふては

身命を捨てといへることを

かりそめの色のゆかりの恋にだに

逢ふには身をも惜しみやはする

—— 法然上人ご法語 ——



十六羅漢図

男が女をいとしいと思い、女が男を慕う心は、まことに華麗であり陶醉的であり、また美しいことではあるが、同時にかなしいことでもあります。

そんなら好きになどならなければいいのに、というのは、本当に人を愛したことのない人間のいうことであって、男と女というものは好きになってしまふと、もうどうにもならぬものです。

男と女の恋心がかないもの、無常なものとかわかっていても、どうにも逢わずにはおれぬ、そんな心がまことに悲しい。

「かりそめ」の愛でさえ人は命を惜しまぬものならば、ましてやこの世の愛を超えた仏の慈悲にめぐめ、真実の自己にめぐめていくためには、なおのこと命を惜しんではならぬと歌に示されているのです。



竹虎図 長谷川 等伯筆

仏心とは大慈悲無縁の慈しみをもって

もろもろの衆生を摂するなり

(観經)

法然上人ご法語

二才をすぎた娘がテレビを見ている。そして突然涙を浮かべたかと思うと泣きだした。主人公の女の子が、いわれない罪で厳しい叱りをうけ、その悔やしさと悲しきにキツと唇をかみしめている。娘は主人公とともに苦しみ悲しんでいるにちがいない。今は母の胸で泣いている。

私はひとの苦悩を同じところで涙し、その苦しみや寂しさを分かあえるだろうか。自分にその苦痛と同じ体験がないとき、ほんとうの涙は流しえないと思う。また自分の逆境のときは涙など出る余裕もなく、ただ人ばかりを怨んでいる。しかしそれをどこかで見守り、ともに涙をしていられる方がいたとしたら、私たちは素直にその懐に帰っていいけはしないか。

阿弥陀さま——私の故里、いのちです。



勅使門

速に三界六道を厭て

西方常樂の門に入るべし

——西山上人 ご法語——

ある人が地獄と極楽を見物してきました。

地獄では、大勢の人びとがごちそうを一杯ならべたテーブルの両側にならんで坐っていました。そしてそれぞれの前に一メートルもある長い箸が一膳ずつ置いてあります。

「食事はじめ！」の合図とともに、皆が長い箸をとって争ってごちそうを食べようとしますが、長い箸が邪魔しあつて、誰も一口も食べることができませんでした。

一方極楽では、長いテーブルの上のごちそうも、長い箸も地獄と少しも違いはありません。「食事はじめ」の合図で、人びとは長い箸をとり、それぞれ向い側の人の口にごちそうを運んでやるのです。長い箸は、向い側の人の口に食物を入れてやるには便利で、みんなニコニコして、代わるがわる食事を楽しんでいました。

阿弥陀仏

ここを去ること

遠からず

(観無量寿經)



中 門

遠くに見える村の屋根／近くに見える

町の軒／

森や林や田や畑／

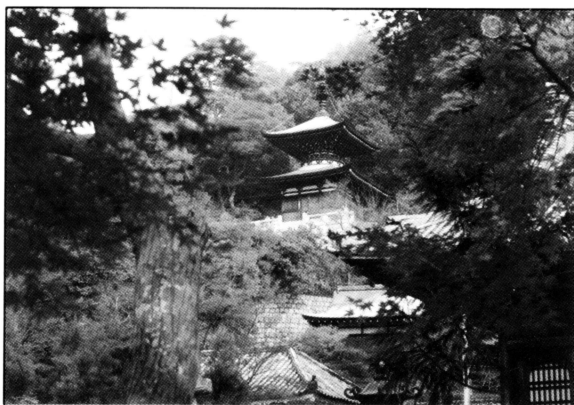
あとへあとへと飛んでいく／

(文部省唱歌『汽車』より)

この歌の素晴らしいところは、車窓から見る外の景色が、「あとへあとへと飛んでいく」と見ているところにあると思うのです。

実際は汽車が動いているのであって、景色が動く筈がないというのは私たちの「思議」ではないでしょうか。私たちの思議を離れた見方があるという、この「事実」。

こういう見方が素直にうなづけるとき、私たちから「目的地(阿弥陀仏の世界)」へ出向くのではなく、「目的地」の方から私達の方へ寄って来て下さる——ということが、私たちの前に展開されてくるのです。



多 宝 塔

慚愧懺悔の心あることなき者は 往生を得ず

善導大師「往生礼讃」前序

鎖国を保っていたチベットに、単身潜入してラマ教の研究を成しとげた明治の豪僧・河口慧海師が次のような挿話を紹介している。

一人の泥棒が聖山カイラスに対してさんげしていた。ところがその男は、過去の罪だけでなく、ついでに将来犯すであろう罪の分まで、かためてさんげしていたのだ！

自らの罪、自らのおろかしさをさんげすることが信仰の出発点です。さんげによって、心の中に大きな変革が成しとげられなければなりません。このように罪深い自分ですら救われていくという驚きと感激——その心の中に、今までと同じように平気で罪を重ねていくという気持が起きるものでしょうか？

しかし、チベットの泥棒の身勝手なさんげを、笑ってられないのが、現代の私たちでもありはしないでしょうか？

総本山 永観堂禅林寺



永観律師像

身を端し行を正しくして、ますく諸善を作し、己を修め、
 体を潔くし、心垢を洗除し、言行忠信にして表裏相応すべし。

——無量寿經——

私は外面は賢そうに善人ぶっていても、内心はみにくく、いやらしい人間であります。今風に申すなら、本音と建前を上手に使い分けていると云う事になります。でも、そんな私も、一瞬の間、反省もし、少しく努力しようと思えますが、長続きしません。

「努力がたらん」とおっしゃるかも知れません。私には、その努力する事すらできない。本音と建前は一つになるところか、ますく間をあけてまいります。仏様は「おまえには本音と建前、何時までたつても、一つにはならないぞ」とお示し下さいました。なんとうれしい事ではありませんか。だからこそ、私はできない乍ら、なお、一つにしよう、つとめるのです。

総本山 永観堂 禅林寺

往生というのは、仏の御心とわが心と

一に成りあいたる所を申すなり

——西山上人「安心鈔」——



山越阿弥陀図

死者のためにだけ仏教があるのではありません。が、生きている私達が往生するって、どんな状態なのでしょう。恋人や友人家族との楽しいひとときのことでしょうか。それだって、後になって考えると、もうむなしさが混じりこんでしまいます。

西山上人は、仏の御心とわが心が一つになった状態を往生だと説いておられます。そして、それは「南無阿弥陀仏」のお念仏だと示して下さっているのです。

そういえば、四十五歳になった筆者は、毎日称えるお念仏の中に、何ともいえない清々しい境地を、ときどき味わえるようになりました。これが往生なのかしら、とフツと思うことがあります。